

人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育

—新潟県粟島の取り組みと小中学生の将来に対する意識に注目して—

大脇 和志

I. はじめに

日本は人口減少時代に突入したと言われている（増田編，2014）。2017年4月に発表された最新の推計値によれば，2065年には約8808万人にまで減少すると予測されている（国立社会保障・人口問題研究所，2017）。離島地域の人口の減少は顕著であり，特に若年層の流出に歯止めがかからない。高校や大学への進学を機に島を離れざるを得ない子どもが卒業後も戻って来ず，島の若年層が少ないので，更に子どもの数も減少するという，悪循環に陥っている。離島地域では，学校の存続をかけて，子どもの数を一定数確保するために全国から離島留学の受け入れるなどの取り組みが行われている。

こうした現状があるなかで，離島地域の学校では，子どもたちが大人になって社会生活を営んでいくことを，どのように考え，教育活動に取り組んでいるのだろうか。このことは，子どもが将来どのように生きていくのかという意味での「キャリア形成」の問題と密接に関係している。

キャリア教育は，「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」とされる（文部科学省，2011，p. 17）。この定義を示した中教審答申を基点に，教育改革の中で，学校全体で取り組むべきこととして重視する傾向にある（文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター編，2016）。答申は第6章で地域との連携の重要性を説いており，それをうけて文部科学省は2013年度から「地域キャリア教育支援協議会設置促進事業」を展開し，地域ごとのキャリア教育の推進を展開してきた¹⁾。しかし，地域とくに離島地域の特性に応じたキャリア教育の研究はそれほど活発でない²⁾。離島地域の実態に即したキャリア教育を実現するためにも，事例研究の積み重ねが不可欠である。学校教育が子ども一人ひとりの自己実現を尊重し，支援するべきであるという理念は，

時として地域の論理との緊張関係をもたらす。それがもっとも顕在化するのが離島地域なのである。

このような背景から、本研究では、人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育の展望を明らかにすることを目的とし、新潟県の粟島を事例として取り上げる。人口減少時代の生き残りをかけ模索する離島地域は全国各地に存在する（益田，2016；森川，2015）。しかし、粟島は一島一村の体制で、学校も小中それぞれ一校のみであるから、行政の施策と学校の関係が追いややすいこと、粟島浦村は地方創生戦略のなかで、しおかぜ留学制度やキャリア教育など、教育を前面に押し出した取り組みを積極的に行ってきたこと（大脇，2017）などから、本研究の対象として適切であると考えた。そこで、文献研究を進めるとともに、2017年9月に実地調査を行い、粟島浦小中学校の教職員や関係者に聞き取り調査を行うとともに、同校の児童・生徒に質問紙調査を行った。

本研究は以下の手順で進める。まず、村の学校を存続させるために、粟島浦村で取り組まれてきた教育活動について整理し、その内容が児童・生徒のキャリア形成に働きかけうるものであることを明らかにする（第Ⅱ章）。次に、質問紙調査の計画、結果を整理し、実際にそのような教育環境におかれた児童・生徒は、将来に対してどのような意識を有しているのか、明らかにする（第Ⅲ章）。その上で、ここまで明らかにした粟島でのキャリア教育の取り組みと児童・生徒の将来に対する意識から、粟島でのキャリア形成の展望を明らかにし、課題を析出する（第Ⅳ章）。このような手順をへて、人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育が、一人ひとりの成長と村の存続という、二重の論理で展開されており、両者をうまく調整することの重要性が示唆される。

Ⅱ. 粟島浦小・中学校におけるキャリア教育

1. 粟島浦村の地方創生戦略

国勢調査の推移をみると、粟島浦村の人口は370（2015年度）で、1955年の885人をピークに、1960年以降減少し続けてきた。児童・生徒数も1956年度の199人をピークに減少を続けた。1995（平成7）年には、釜谷集落にあった分校が閉校した。児童・生徒数が11人にまで減少した2012年度、村は次年度（2013年度）から島外からの「しおかぜ留学」を受け入れることを決めた³⁾。しおかぜ留学は全国の離島地域で取り組まれている離島留学のひとつであり、粟島では小学5年生から中学3年生までの児童・生徒を1年間、粟島浦小中学校で受け入れる。里親のもとで生活する制度をとっている自治体もあるが、粟島の留学生は村が用意した寄宿舎で寮生活を行う⁴⁾。

1年目（2013）には6人、2年目（2014）には9人、3年目（2015）には10人と、徐々に寮の定員（10名）を充足するようになってきた⁵⁾。このように留学生を受け入

れることによって、栗島浦小中学校の児童・生徒数が増加するとともに、学校規模に応じた教員配置数の増加が実現した。例えば実施2年目の2014年には、技術、英語の教員を計2人増やした。留学制度は「人数が増えたことで、専門教諭を増やして教育の質も高められる」（加納博志校長・当時）と、島内外を問わず栗島浦小中学校のすべての生徒にとって良い効果があることがアピールされた⁶⁾。

村はしおかぜ留学制度の取り組みによって、栗島の人口減少が食い止められているという成果を強調している（栗島浦村，2016a）。

「地域のきずなの象徴である学校の存続、同級生の確保による切磋琢磨する学習環境の向上、そして離島ならではの少人数教育環境を島外の納税者たちに提供することより、栗島が存在する価値を国や県に認めていただくという意味で、しおかぜ留学は栗島にとって貢献度が高いといえます。」（栗島浦村，2016a，p. 19）

このように、しおかぜ留学は、村政のなかで大きな意義がある施策として、重視されているといえる。人口減少時代に村を存続させるために、村は次々と新たな政策を打ち出してきた。その間、国の地方創生の政策の一環で人材派遣を受け入れたり、地域総合整備財団の事業として人材の提供をうけたりと、外部から人材を招き改革に取り組むことで、島にはなかった新たな施策に挑戦してきた⁷⁾。その特色ある取り組みとして、もう一つ、キャリア教育に触れておきたい。

このキャリア教育については、「『村に仕事がないからUターン出来ない』ではなく、『仕事がないのであれば、自ら仕事を作る』という考えに基づいて実施しているもの」である（栗島浦村，2016a，p. 18）。「子どもたちが島に帰るきっかけをつくるためにもキャリア教育は欠かせない」と考えられているのである。また、地域総合整備財団の報告書では、「教育と産業の連携を促し、子どもたちの「地域の誇り」「ビジネスマインド」の醸成を図る」ことが目的として謳われている（地域総合整備財団，2016，pp. 49-50）。

具体的には、栗島浦中学校の生徒に対して、総合的な学習の時間を活用したキャリア教育を事業として実施してきた。2015年度には、島で作られていた大豆「一人娘」を材料に用いたアイスクリーム作りを行った。

この取り組みでは、全4回の授業のなかで、商品の企画、味の検討から、パッケージデザイン、ネーミングの検討、そして商品の付加価値化のための地域のPR手法の検討に、販売戦略（売り方、売り場、価格など）の検討などを行ったという。華井（2017）も紹介しているように、パッケージ（写真1）描かれている「豆ずきんちゃん」は中学生が原案を出した。

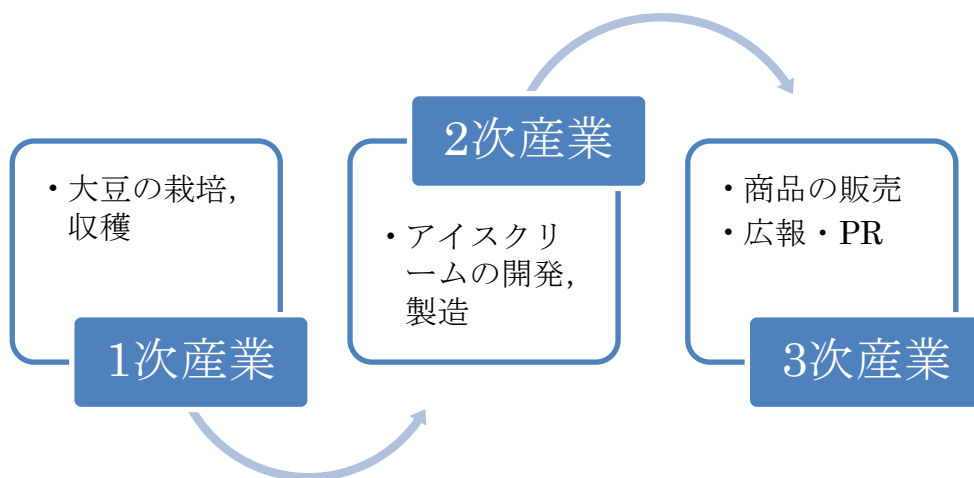
完成した開発商品は新潟県知事に進呈するとともに、新潟市などで販売実習を行った⁸⁾。

このような体験を通して、生徒たちは、島にある資源を活用し、6次産業化を進めるノウハウを学ぶのである。

この取り組みに携わった JTB 総研の上田が報告するところによると、まずは県内の生協と交渉し、商品を取り扱ってくれる販路を確保した上で、生協を通じて製造を引き受けてくれるメーカーに打診することで、商品化が実現可能になった。製造を長岡市の製菓工場で行うことは、島外で加工を行い、リスクを抱えずに市場だけ持つ（地域総合整備財団，2016，p. 53）ということである。また「中学生による」と銘打つことによって、マスメディアに取り上げられ、商品の広報，PRは十分であった。生徒は、商品化の後も、島外での活動の折に販促活動を継続的に行っているようである。



写真1 商品開発したアイスクリーム
(2017年9月4日 筆者撮影)



第1図 6次産業化を体験するキャリア教育のビジョン（筆者作成）

村は今後の地方創生戦略として、3つの「攻めの創生戦略」、4つの「守りの創生戦略」を策定している（栗島浦村，2016b，p. 8）。その全体構造については大脇（2017）によるとして、教育に関しては3つの「攻めの創生戦略」の第一に掲げられている柱、「そだつ・やすらぐ・たすかる（人財育成・生活支援領域）」のなかで、具体的に以下のような目標が掲げられている。

- ① 「15の春」までに、島で暮らせる・島に戻れる知恵・技能の獲得
- ② 島の魅力を活かした留学制度の強化

（栗島浦村，2016b，p. 9）

①については、施策の方向性として、島の子どもが高校進学を機に島外に出ることを踏まえ、「離島をハンデにしない基礎学力の定着」と、「将来的に栗島へのUターンを検討できる（栗島での魅力的な仕事を創発できる）知恵や技能を身につけられる機会」の多角的な確保を挙げている（栗島浦村，2016b）。後者の「仕事の創発」という文言が特徴的である。具体的な施策内容としては、教育大綱の策定、栗島浦小中学校の小中一貫校化、キャリア教育プログラムの運営、自然教育プログラムの構築、などが挙げられている。ここでも掲げられている「キャリア教育プログラム」とは、「島の資源を活かして外貨を稼ぐノウハウを習得する」（栗島浦村，2016b，p. 10）ことにねらいがおかれている。「当面は、平成27年度の実績を活かし、大豆・一人娘の生産・加工・販売体験を3年間のローテーションで定着」させるという（栗島浦村，2016b，p. 10）。

②については、「しおかぜ留学」の定着、改善を方針として、具体的には、里親制の検討、卒業生とのネットワークの構築などが施策内容として挙げられていた。寮生活の改善は重要課題であると思われるが、多くの離島留学実施自治体では、里親のなり手が不足するなどの課題を抱えており、他の自治体と逆行する里親制の受け入れが功を奏するか、見通しは不透明である。留学制度修了生のネットワーク化は、同窓会の立ち上げ、成人式への招待などを通して、修了生に「第二島民」として栗島とつながってくれることを期待してのものである。

以上のように、島の人口減少を食い止めるという目的からスタートした、教育改革、その具体的な実践の一つとしてのキャリア教育が、行政が意図する政策としてあるのである。

2. 学校で取り組むキャリア教育

では学校としては、どのようにキャリア教育に取り組んでいるのだろうか。

村の学校は、内浦地区にある栗島浦小中学校が一枚あるのみである。小学校と中学校は同一の敷地、校舎を利用している。釜谷地区には、かつて栗島浦小中学校の分校があったが、平成7年3月に閉校した⁹⁾。

栗島には高校がないので、島外の高校に進学する場合がほとんどである。村は村上市に晴海寮という寮を設置しており、そこで朝晩まかない付の寮生活をしながら村上や新発田など下越地域の高校に通う生徒が多い。

栗島浦小中学校のキャリア教育の全体像を明らかにするために、「栗島っ子プラン」を取り上げたい（栗島浦小中学校，2017，p.74）。「栗島っ子プラン」は、新潟県がキャリア教育のモデルプログラムとして提案した「新潟っ子プラン」を、児童・生徒や地域の実態に合わせて栗島浦小中学校が「自校化」したものである。新潟県では、2008年から「個を伸ばす教育」を理念に掲げて、キャリア教育に先進的に取り組んできた¹⁰⁾。「新潟っ子プラン」は、2009～2010年にかけて県が行った「キャリア教育パイロット事業」で明らかになった課題を踏まえ、新潟の特色を生かしたキャリア教育の目指す目標を明確にし、それを小中高と系統的に取り組むために開発された。中央教育審議会答申が示した4つの「基礎的・汎用的能力¹¹⁾」に加えて「生まれ育った地域に根ざすアイデンティティをもった新潟っ子を育む」という趣旨で「郷土愛」の視点を加えた5つの視点を設定している（新潟県教育委員会，2011b，p.65）。

この5つの視点は、さらにそれぞれ3つの具体的な重点項目を設定し、発達段階（小学校低学年／中学年／高学年／中学校／高校）を考慮することで、最終的には第1表のようなマトリックスを形成している。

では、このモデルにもとづいて栗島浦小中学校が作成した「栗島っ子プラン」には、どのような特徴があるだろうか。「栗島っ子プラン」の全体像は第1表のとおりである。

第一に、地域の人々とかかわる村の行事に参加することが、キャリア教育の重要な機会としてとらえられている。栗島では年間を通してさまざまな村の行事がある。4月、年度がはじまって早々にわかめ作業。5月には島びらき、6月には海岸の清掃作業、10月には祭礼や村民運動会、など、地域の人を巻き込んでの行事／地域の行事に参加していく傾向がある。地域での活動にかかわることで、知らず知らずのうちに栗島に親しむようになっていくといえる。

第二に、交流学习、修学旅行など、島外に向かう機会に、キャリア教育にかかわることが多く位置づけられている。島を出ての活動は、ふだんは体験しないことを体験する重要な機会として位置づけられていた。

小学校の交流学习は、春と秋の年二回行われる。2017年度は村上市立村上小学校との間で春は5月17日の日帰り。秋は10月に胎内市で2泊（うち1泊は民泊）。春は

第1表 粟島っ子プラン（粟島浦小中学校，2017，p.74より引用）

教育目標	粟島浦小中学校		中学校期		4領域8能力 別応用 領域 能力	
	低学年	中学年	高学年	中学校期		
◇ 社会の情勢変化に柔軟に対応できる生き抜く力を身に付けた新島っ子を育て	<p>1ちくぐがすきで、ちくくのよいところをいえる。</p> <p>2「ありがとう」「ごめんなさい」がいえる。</p> <p>3じぶんのかんがえをみんなのまえで話せることができる。</p>	<p>1地域の特色やよさがわかり、愛着をもって地域の自然や人とかがわらうとしている。</p> <p>2返事やあいさつ、「ありがとう」「ごめんなさい」がいえる。</p> <p>3自分の意見や気持ちをはっきりと伝えることができる。</p>	<p>1地域の特色やよさがわかり、愛着をもち、自分のできることで貢献しようとしている。</p> <p>2適切な言葉づかいで、相手や場面に応じて適切な言葉づかいや返事ができる。</p>	<p>地域の活性化の課題調査学習（3年総合10月～2月）</p> <p>児童会活動（10月、全校7月） （2年長部～10月、全校7月）</p> <p>1地域の特色やよさがわかり、愛着をもち、自分のできることで貢献しようとしている。 （各学年2月） （各学年2月）</p> <p>児童会活動（10月） （各学年2月）</p>	<p>郷土愛</p>	コミュニケーション能力
	<p>4ともだちとなかよくあそんだりたすけあったりできる。</p> <p>5じぶんにはよいところやとくいなものがある。</p>	<p>4友達と協力し合って学習や活動をする。</p> <p>5自分の長所や自分らしさがわかる。</p>	<p>4より良い人間関係を築くことができる。</p> <p>5他人の良さや気持ちや意見を尊重しながら、協力して仕事や活動をする事ができる。</p> <p>6自分の長所や個性を理解し、自分を大切にできる。</p>	<p>総合学習発表会（10月・2月）</p> <p>運動会（6月） 文化祭（11月）の取組等 児童会活動（10月） （各学年2月）</p> <p>総合学習発表会（10月・2月）</p> <p>運動会（6月） 文化祭（11月）の取組等 児童会活動（10月） （各学年2月）</p>	<p>人間関係形成能力 社会形成能力</p>	
◇ 生まれ育った地域に根ざすアイデンティティ	<p>6じぶんの好きなものややりたいことをえらぶことができる。</p>	<p>6自分の好きなものややりたいことを自分の考えで選ぶことができる。</p>	<p>7自分の個性や興味・関心を生かした活動や学習を選択することができる。</p> <p>8自分で選んだことや行動したことは自分で責任を持つことができる。</p>	<p>総合学習発表会（10月） 運動会（9月） 文化祭（11月）の取組等 児童会活動（10月） （各学年2月）</p> <p>総合学習発表会（10月） 運動会（9月） 文化祭（11月）の取組等 児童会活動（10月） （各学年2月）</p>	<p>自己理解・自己管理能力</p>	<p>自己の理解能力</p>

課題解決能力	計画実行能力	役割把握・認識能力	情報収集・探索能力	意思決定能力
課題対応能力				
<p>7 当番や係の仕事に選んで取り組むことが出来る。</p> <p>8 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考え自分なりにしている。</p> <p>9 好きなことは、しぶんでおこなおうとする。</p>	<p>8 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考えている。</p> <p>9 好きなことや、むずかしいことも、最後までやり通す。</p>	<p>10 自分や周りの人の生活や社会の役に立つと認める。</p> <p>11 学校での学習やさまざまな活動を通して、自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>12 将来の夢や仕事や社会の社会的役割の意義を理解し、将来について考えている。</p> <p>13 自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>9 仕事や課外活動などで与えられた内容に対して積極的に確実に取り組むことが出来る。</p> <p>10 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考え自分なりにしている。</p> <p>11 好きな課題や好きな学習や活動に対して最後まで取り組んでいる。</p>
<p>10 自分や周りの人の生活や社会の役に立つと認める。</p> <p>11 学校での学習やさまざまな活動を通して、自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>10 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考えている。</p> <p>11 好きなことや、むずかしいことも、最後までやり通す。</p>	<p>12 将来の夢や仕事や社会の社会的役割の意義を理解し、将来について考えている。</p> <p>13 自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>14 幅広い選択を準備させるための課外や活動に関する情報を集めたり、調べたりしている。</p> <p>15 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分のめざす将来の進路計画を立案している。</p>	<p>10 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考え自分なりにしている。</p> <p>11 好きな課題や好きな学習や活動に対して最後まで取り組んでいる。</p>
<p>11 好きな課題や好きな学習や活動に対して最後まで取り組んでいる。</p>	<p>11 好きなことや、むずかしいことも、最後までやり通す。</p>	<p>12 将来の夢や仕事や社会の社会的役割の意義を理解し、将来について考えている。</p> <p>13 自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>14 幅広い選択を準備させるための課外や活動に関する情報を集めたり、調べたりしている。</p> <p>15 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分のめざす将来の進路計画を立案している。</p>	<p>11 好きな課題や好きな学習や活動に対して最後まで取り組んでいる。</p>
<p>12 将来の夢や仕事や社会の社会的役割の意義を理解し、将来について考えている。</p> <p>13 自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>12 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考えている。</p> <p>13 自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>	<p>14 幅広い選択を準備させるための課外や活動に関する情報を集めたり、調べたりしている。</p> <p>15 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分のめざす将来の進路計画を立案している。</p>	<p>16 職業への関心があり、職業体験や様々な体験を通して、自分にあった職業を考えている。</p>	<p>12 将来の夢や目標に向けて、今しなければならぬことを考えている。</p> <p>13 自分の将来のために、今の学習や活動は必要だと感じている。</p>
<p>14 幅広い選択を準備させるための課外や活動に関する情報を集めたり、調べたりしている。</p> <p>15 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分のめざす将来の進路計画を立案している。</p>	<p>14 幅広い選択を準備させるための課外や活動に関する情報を集めたり、調べたりしている。</p> <p>15 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分のめざす将来の進路計画を立案している。</p>	<p>16 職業への関心があり、職業体験や様々な体験を通して、自分にあった職業を考えている。</p>	<p>16 職業への関心があり、職業体験や様々な体験を通して、自分にあった職業を考えている。</p>	<p>14 幅広い選択を準備させるための課外や活動に関する情報を集めたり、調べたりしている。</p> <p>15 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分のめざす将来の進路計画を立案している。</p>

交流授業を1時間受け、給食、清掃までを村上小学校の児童と一緒に過ごす。その前後は社会見学にあてられる。秋は1日目に体験活動を行った後、2日目の午前中が交流学習で、午後は農業体験、夜は民泊を体験する。

中学校の交流学習は、2017年5月17日から19日の二泊三日の行程で、村上市と弥彦村を訪れて行われた¹²⁾。新潟日報が報じたように、栗島浦中学校は約20年前から村上・岩船地域の関川中学校などと交流をしてきたが、神納中との交流は初めてだった。17日、18日は、神納中で授業や部活動を通して交流し、18日夜は、弥彦村内の旅館に宿泊。19日は10:00から11:30まで、弥彦村の「おもてなし広場」で観光PRを行った。新聞記事によると、生徒らが枝豆アイスや特産の海草「ギンバソウ」の試食・販売を行った。こうした交流学習が、キャリア教育の絶好の機会と考えられているのである。

第三に、ビジネスマインドを育てる、仕事の創発、などの文言は、「栗島っ子プラン」の中には見られない。ただし、「夢おこす力（キャリアプランニング能力）」の部分に総合的な学習の時間が位置づけられており、この一環として、先に取り上げた村主導のキャリア教育が行われている点では、整合している。

なお、この「夢おこす力」の部分には、多くの学校で行われている、職業調べや職場体験学習などが挙げられている。職場体験学習は、2017年は中学二年生4人が栗島郵便局、栗島汽船、村役場、保育園の4つの受け入れ先で行われた。8月末に発行された学校だより「日本海を越えていく」には、4名の職場体験学習の感想が掲載されていた。また学校を訪問すると、中学二年生が職業調べを行ったまとめを、校舎の廊下に掲示していた。生徒が関心にもとづいて、スポーツ選手、コンピュータ技術者、保育士、料理人などの職業を調べた内容で、仕事の内容、仕事につくまでの流れ、資格、仕事のやりがい、などの項目を立ててまとめていた。

3. 村の施策と学校教育のいうキャリア教育は一致しているか

ここまで、栗島においてキャリア教育が特色ある形で取り組まれていることをみてきた。過疎地域が抱える学校存続の危機と、その危機を克服するためのキャリア教育への重点的取り組みという構造がある。問題であるのは、村政が取り組むキャリア教育と、学校が取り組むキャリア教育は、完全には一致しないことである。

村政がいうキャリア教育は、地域の資源を産業化するという発想にたっており、起業(家)精神を育む教育ということができよう。これは、2011年の答申よりも前の「キャリア教育」の捉え方に近いともいえる。勿論、山根(2012)のように、キャリア教育に起業教育的要素を含めることは、一般的理解として誤っているとは言い難い。ただし藤田が指摘するように、「キャリア教育における『勤労観・職業観』の…(中略)…形成主体のとらえ方が転換した」ことは重要である。すなわち藤田は、答申が「『働くこと』にどれだけの重要性を持たせるのかは、最終的に自分で決めること」と指摘

することについて、「職業観・勤労観を含む価値観は、たとえ子どもであっても本人が自ら形成するものであるとされたこと」、「個々人の価値観の形成や確立は「様々な学習や体験を通じて」なされるものであるとされたこと」から、「他者が（多くの場合、教師が）子供の職業観・勤労観を形成するという「草創期のキャリア教育」における前提自体が、大きく転換している」ことを強調している。（藤田，2014，p. 68）。

村政主導の教育の取り組みについては、課題もある。留学制度にせよキャリア教育の取り組みにせよ、村の予算によって成り立っている活動であることから、学校としていつまで継続して取り組むことができるのか、長期的な見通しを立てにくい。2018年には二年に1度の修学旅行があり、その際に東京の表参道にある新潟県のアンテナショップ「ネスパス」で販売体験を行うことが計画されていた¹³⁾。

Ⅲ. 児童・生徒の将来に対する意識

1. 調査の概要

ここまで明らかにしてきたように、粟島においては島の子どものキャリア形成に密接に関係する教育活動が積極的に行われている。キャリア教育が職業観・勤労観の形成に限られない幅広いものとして学校の教育計画には位置づいていた一方で、行政が思い描くキャリア教育は子供の将来の職業観の形成を強く意識した内容になっていた。それでは、児童・生徒は将来に対してどのような意識をもっているのでしょうか。

そこで本研究では、粟島浦小中学校の児童・生徒全27名に質問紙調査を実施することとした。調査票の設計にあたっては、ベネッセが2009年に実施した第2回「子ども生活実態基本調査¹⁴⁾」（以下、ベネッセ調査2009と表記する）の4つの質問項目について、同一の質問文を用いた。4つの質問項目とは、希望する進学段階、なりたい職業の有無、職業を選択する際に重視すること、将来像である¹⁵⁾。これに加えて、独自の質問項目として、将来粟島で生活したいと思うか、尋ねた。そして、肯定的な群に対しては、将来粟島で生活するとしたら、どのような職業を選ぶか尋ね、否定的な群に対しては、そう思わない理由を尋ねた。調査は教員の協力を得て、集合調査法で2017年8月におこなった。回収できた質問紙は26名分で、回収率は96.3%である¹⁶⁾。回答者の基本属性は、第2表のとおりである。

第2表 回答者の基本属性

2. 将来の職業

粟島の子どもたちは、将来どのような職業になりたいと考えているのだろうか。ベネッセ調査2009では、小学校4年生から高校2年生を対象に、「将来なりたい職業」があるかどうか尋ね、「ある」と答えた中学生以上の生徒には、その職業を具体的に答えてもらっている。本研究が実施した調査では、小学生を含むすべての児童・生徒に対して、なりたい職業を具体的に答えてもらうこととした。

	男	女	計
小学生	5	7	12
中学生	8	6	14
計	13	13	26

その結果、なりたい職業があると答えたのは、26人中23人であった。ベネッセ調査2009では、なりたい職業がある児童・生徒は各学年50%前後であったことから、栗島の子どもたちは「将来なりたい職業」をより強く意識している傾向にあるといえる。そして、具体的な「将来なりたい職業」については、第3表のような内訳であった。スポーツ選手に該当する児童生徒の回答は、野球選手や陸上選手など競技種目は異なるが、筆者がスポーツ選手という形でまとめた。同様に、飼育員、農林業についても、同様に筆者がまとめてつけたラベルである。

ベネッセ調査2009の結果は、小中学生男子が将来なりたい職業は「野球選手」「サッカー選手」などスポーツ選手が不動の人気であるとし、小学生女子は「ケーキ屋さん、パティシエ」、中学生では「保育士・幼稚園の先生」が1位であった。ベネッセ調査2009では、「高校生になると男女とも現実的な職業が上位に入ってくる」ことから、「中学生から高校生にかけてが、職業を現実的に考える分水嶺となっているようだ」と分析する（ベネッセ教育研究開発センター，2010，p.142）。

第3表 栗島浦小中学校児童・生徒の将来なりたい職業

職種	人数(人)
スポーツ選手	5
飼育員	4
獣医	2
農林業	2

※その他、医師、飲食店員、エンジニア、看護師、警察官、スポーツ店員、美容師、保育士、料理人、が各1人

第4表 小中学校別、男女別の回答一覧

	男子	女子
小学生	野球選手3 バスケットボール選手	飲食店員 看護師、警察官 飼育員、スポーツ選手 美容師、保育士
中学生	エンジニア、獣医 スポーツ店員、農林業 動物にかかわる仕事2 陸上選手、料理人	医師、獣医 動物の飼育員2

栗島の子どもたちの将来のなりたい職業をみると、小学生こそスポーツ選手と答える児童が多いものの、中学生は比較的現実的な職業を選ぶようになってきている。栗島で暮らす中学生には、現実をより意識する機会があるということだろうか。

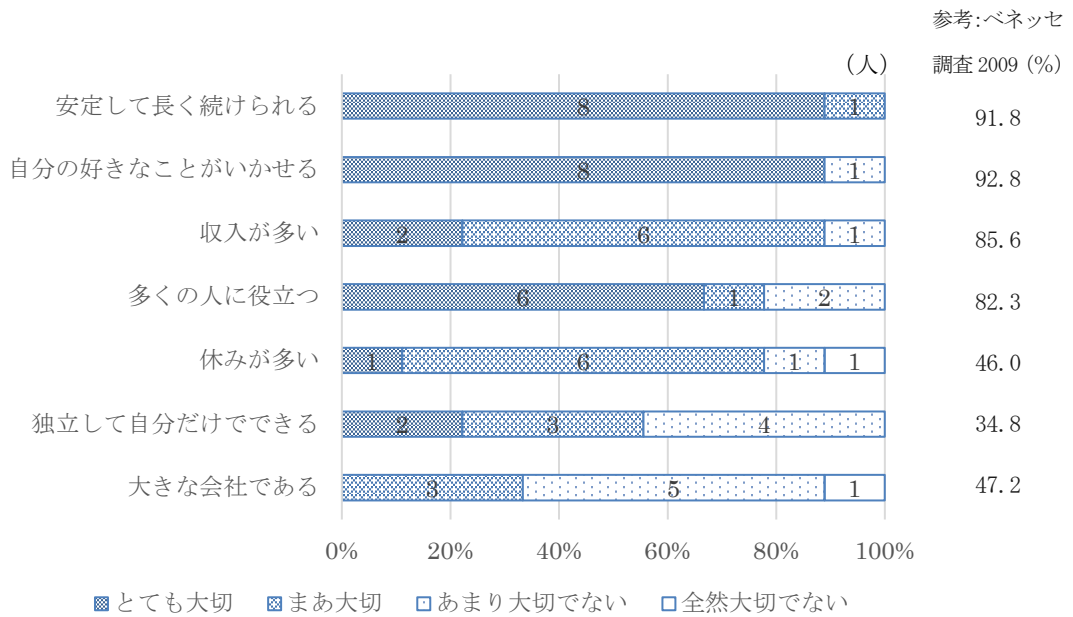
なお23人中、自然、動物にかかわる職業を挙げた児童・生徒が多くみられた。島の自然の豊かさを理解しているとともに、栗島牧場での馬とのふれあいなどが、こうした職業へ児童・生徒を方向づけているといえる¹⁷⁾。

次に、職業を選択する際に重視することを、中学生のみ(n=14)まとめたのが第2図である。無回答が多かったので、回答している9名のみを表に示した。回答した生徒の傾向はベネッセ調査2009とそれほど大きく変わらず、「安定していて長く続けられる(安定志向)」「自分の好きなことがいかなる(好きなこと志向)」が強い。ただ、「休みが多い」「独立して自分だけでできる(独立志向)」職業を志向する傾向は、栗島の中学生の特徴のようである。特に独立志向については、2004年から2009年にかけて、ベネッセ調査では低下傾向にあった。この独立志向が栗島のキャリア教育の成果といえるのかどうかは、更なる検討が必要であるが、要因の一つと考えることもできよう。

3. 将来像

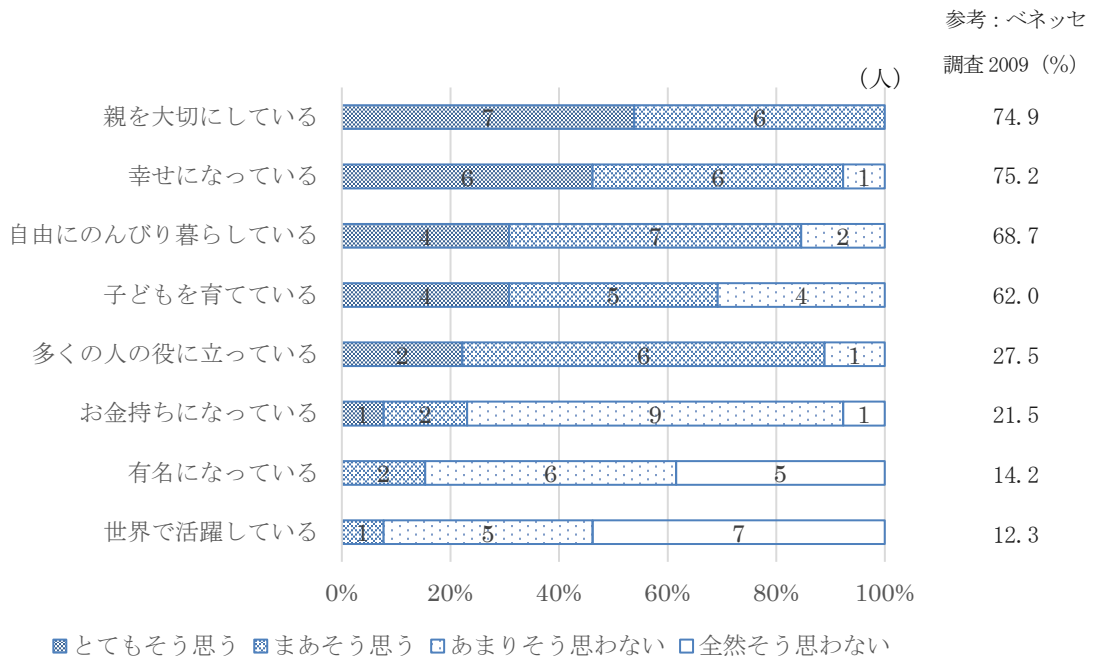
以上のような将来の職業に関する意識に関連して、子どもたちは自分たちの将来をどのように思い描いているのだろうか。本研究の調査ではベネッセ調査と同様に、「あなたが40歳くらいになったとき次のようなことをしていると思いますか」と尋ね、8つの項目についてそう思うかどうか4段階で答えてもらった。調査当時の中学校3年生なら25年後、2042年とずいぶん先の話であるが、25名の児童・生徒の回答は第3図のとおりとなった。「幸せになっている」という漠然とした肯定的・楽観的な展望は、2009年の全体的傾向よりも強い。より具体的な点では、例えば「親を大切にしている」や「子どもを育てている」など、「身近な他者との親密な関係」を重視する傾向も、ベネッセ調査2009と大きく変わらないが、栗島の子どもは特に親への意識が強いといえる。

一方で、「世界で活躍している」と答えた生徒は少なかった。「多くの人の役に立っている」への肯定的回答はベネッセ調査2009よりも高いことから、よりローカルな社会貢献を志向しているといえる。



参考数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計%

第2図 栗島浦中学校生徒が職業を選択する際に重視すること (n=9)



参考数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計%

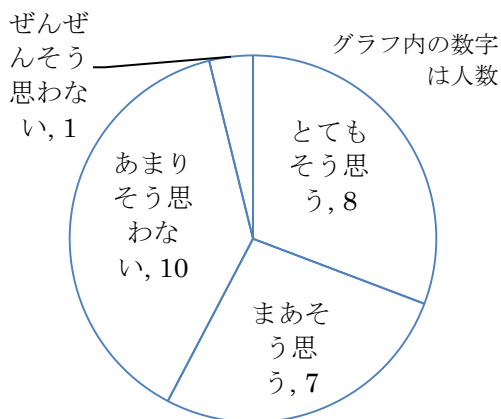
表3図 栗島浦中学校生徒の将来像 (n=14)

4. 栗島での将来の生活

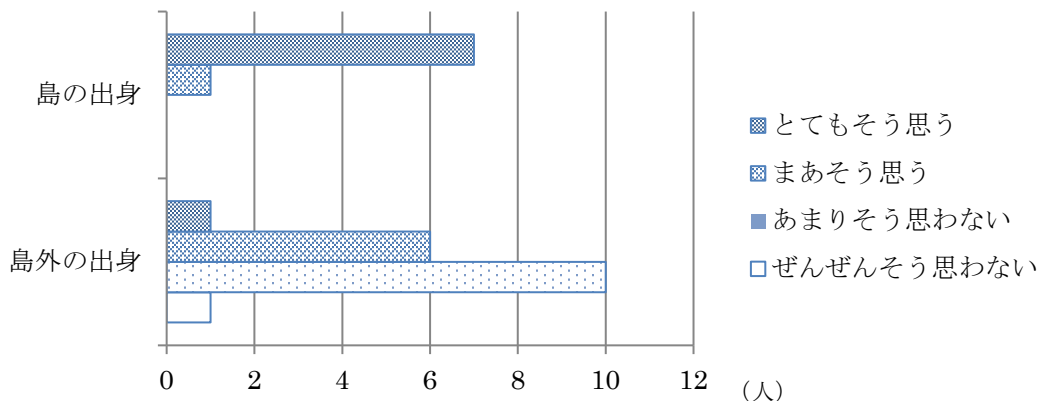
最後に、将来栗島で生活したいかという質問に対する回答は、右の第2図のようになった。これを島の出身か、島外の出身かで分けて示したのが、第3図である。第3図から明らかであるように、将来も島で生活したいかどうかは、島の出身かそうでないかで大きく分かれる結果となった。

では、将来も栗島で生活したいと思う群(=そう思う群)は、栗島で将来も生活するとしたら、どのような職業を選ぶつもりなのだろうか。結果は、牧場で働く(3名)、漁師

(2名)、保育士や教師のほか、栗島汽船(2名)という具体的な会社名を答えた児童・生徒がいた¹⁸⁾。また、そう思う群が将来なりたい職業と栗島で選ぶ職業との一致度は比較的高いといえる。一方で、生活したくない理由としては、不便である、働き口ない、等という意見が記されていた。「仕事がないなら自ら仕事をつくる」という起業精神は、この調査から見出すことはできなかった。



第4図 将来栗島で生活したいか (n=26)



第5図 将来栗島で生活したいかは島の出身かどうかで意見が割れる

IV. 粟島におけるキャリア教育 一人ひとりの成長と村の存続

2017年に新潟県村上地域振興局、村上市・岩船郡青少年健全育成会議が主催した「わたしの主張」村上・岩船地区大会で「島の未来を守る」と題するスピーチを行った粟島浦中学校の女子生徒は、冒頭次のように話した¹⁹⁾。

「あと一年だねえ。」今年に入って何回も言われたこの言葉。少し寂しげな表情で言われます。なぜでしょうか。それは、中学を卒業するということは、私たち島の子どもにとって、同時に島を離れるということだからです。これを機に、戻ってこない人も多いのです。(以下、省略)

本研究が行った調査でも明らかになったように、島で生活する子どもたちは、将来を漠然と肯定的に捉えていた一方で、自分たちがおかれた環境や、将来島で生活する場合の展望を、比較的シビアに捉えてもいた。村政が政策として育成を狙う、起業精神あふれる野心的な意欲は、子どもたちからの意識からははつきりとは見いだせなかった。しかし実際に子どもたちは、島での生活の中から例えば馬や動物とかかわる職業や、医師や看護師、保育士といった島に求められる職業を具体的に意識していた。子どもたちのキャリアプランニングには、リアルな生活の場としての島が一定の影響をもっているといえよう。

粟島におけるキャリア教育について調査することで浮かび上がってきたのは、人口減少に悩む地域におけるキャリア教育の難しさである。なぜならば、人口減少に悩む地域におけるキャリア教育の背景には、村の存続・学校の存続という問題が表裏一体で存在しているからである。

キャリア教育において「職業観・勤労観を含む価値観」はあくまでも子どもたち「本人」が形成するものであって、他者が形成するものではない。しかし、キャリア教育が地域に根ざして行われることが強調されればされるほど、その地域の中でどう生きていくか、その地域に子どもが将来も根づいてくれるためにはどうすればいいか、という発想が強くなり、本人の自由な職業選択やライフスタイルを狭めかねないという懸念が生じる。児童・生徒の意識調査からは、世界に開かれた自分の将来ではなく、身近な範囲での／ローカルな将来像を強く意識しているのは、この地域に根ざすことが明示的にも黙示的にも強調されていると感じ取った結果であるともいえる。

村の存続には若い人々の定住が不可欠である。しかし、若い人々一人一人の人生は、村の意向に左右されるものではなく、一人一人の自己実現が尊重されるべきなのである。村政主導のキャリア教育の難しさはここにあった。

「島のことは考えなくていい。自分の人生だから」。先に引用したスピーチの中で、女子生徒は島の大人からこう言われたことへの「驚き」を紹介していた。島で生活す

るなかでうすうす感じていた大人たちの思いと、一致しなかったからであろう。たとえ「出て行ってほしくない」「戻ってきてほしい」と思っていたとしても、村や学校や島の大人たちには、子どもたちの将来を決める権限はない。子どもは自分自身で選択し、人生を歩んでいく。そして、子ども自身の選択を応援したいという気持ちも、島の大人の多くが確かに抱いているのである。

人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育は、時として矛盾する「村の存続」と「子ども一人一人の成長」の論理を、いかに調整するかが課題なのである。粟島浦中学校が取り組む、「一人一人の社会的・職業的自立」をめざした広い意味でのキャリア教育は、島の子も留学生も関係なく、一人一人の子どもを大切な「島の宝」として、地域の中で育てていこうとする意図がうかがえる。学校は村の存続のためもさることながら、子どものためにこそ存続が必要なのだといえる。

V. おわりに

本研究の目的は、人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育の事例として、粟島浦村におけるキャリア教育の取り組みの展望を明らかにすることであった。粟島浦村においては、人口減少を食い止めるために、また学校を存続させるために、しおかぜ留学を実施するとともに、高校進学を機に送り出す島の子どもがやがて帰って来れるように、という思いでキャリア教育を村政主導で実施していた。ただし、「仕事がないなら仕事をつくる」という、仕事の創発という意識は、児童・生徒の将来に対する意識には未だ明確にあらわれていなかった。さらに、教育改革をうけて学校が取り組もうとするキャリア教育と、村の施策として推進するキャリア教育との間には、子ども一人ひとりの成長と、村の存続・学校の存続という、衝突しかねない二重の論理があった。その調整をいかにおこなっていくか。この点は今後の課題としたいが、引用したスピーチを行った生徒のように、子どもは大人の思いを感じ取っているのであり、島を離れることに葛藤をもっているはずである。その時には、自分のやりたいようにしてごらんと、子どもの自己実現を後押ししたいものではなからうか。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、粟島浦村教育委員会の皆様、粟島浦小中学校の教職員の皆様をはじめ、多くの方々に調査にご協力いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 文部科学省の web ページに事業経過が報告されている。また地域キャリア教育支援協議会設置促進事業の政策意図については、藤田 (2014, p.162) を参照。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1339053.htm (2018年7月24日)
- 2) 引地ほか (2012) のものづくり教育の試みなどがわずかにこの問題に触れるのみである。
- 3) 朝日新聞 2014年9月25日。
- 4) 新潟日報 2014年12月17日。新潟日報の特集記事は、日本離島センターへの取材をもとに、離島留学は佐渡で始まり、九州地方を中心に広がったとしている。「過疎対策の一環で始めた自治体が多いが、近年は全国的な少子化を背景に留学希望者は伸び悩んできた。受け入れ側の島民の高齢化で里親になれる家庭が減少し、留学生の募集を断念する学校もある」という。
- 5) 粟島浦村のホームページを参照。 <http://www.vill.awashimaura.lg.jp/study-iland/study-iland-outline/> (2018年7月24日)
- 6) 教員増と、留学制度の効果に関する発言は、朝日新聞 2014年5月8日を参照。
- 7) 国の地方創生人材派遣制度では、三菱UFJ リサーチ&コンサルタントの阿部剛志氏を、地域総合整備財団 (ふるさと財団) の新・地域再生マネージャー事業では JTB 総合研究所の上田嘉通氏をそれぞれ迎えて、村は政策を推進した。
- 8) このキャリア教育の取り組みは、マスメディアでも報道された。例えば、次の web サイトを参照。
産経ニュース | 新潟・粟島の「大事につくった娘です。」…実は島の全中学生 19人が作った枝豆アイスでした！ <https://www.sankei.com/life/news/151201/lif1512010001-n1.html> (2018年7月24日)
- 9) 閉校した釜谷分校の校舎前には、「釜谷の子らここに輝き」と刻まれた記念碑が建てられていた。校舎は現存しており、数年前までは釜谷集落の集会所などとして使用していたが、建物の土台にヒビ入りが発見されたので立入禁止となっている。
- 10) 「新潟っ子プラン」の詳細については、新潟県教育委員会 (2011b, p.64)。「個を伸ばし教育」は、教育振興基本計画の策定を機に、県の教育委員会が「個を伸ばす教育推進検討会」を設置し、キャリア教育を進めていく中で掲げられた。この方針は 2014年策定の現在の教育振興基本計画においてもキャリア教育の推進は重視されてきた (高井, 2015)。
- 11) 人間関係形成・社会形成能力, 自己理解・自己管理能力, 課題対応能力, キャリアプランニング能力の4つである (文部科学省, 2011)。

- 12) 中学生の交流学習の様子は、新潟日報（2017年5月25日）や三條新聞（2017年5月20日）が報じている。
- 13) 学校での聞きとりによる。
- 14) ベネッセ第2回子ども生活実態基本調査は、「子どもたちを取り巻く社会状況や教育環境が変化するなかで、子どもたちの生活全般にわたる意識や実態をとらえる」ことを目的として、ベネッセ教育研究開発センター（現・ベネッセ教育総合研究所）が2009年8月～10月に行った。学校通しの質問紙による自記式調査で行われ、市区町村の人口密度および人口規模を考慮した有意抽出法により小学生（4～6年生）3,561名（18校）、中学生3,917名（12校）、高校生6,319名（13校）の計13,797名を対象に実施された。報告書はウェブ上に公開されており、将来像については元森絵里子が、将来の職業については谷田川ルミがそれぞれ執筆している。実施時期が古い調査であるが、全国の一般的な傾向性と比較した調査校の特徴をある程度は知ることができよう（ベネッセ教育研究開発センター、2010）。なおベネッセ教育総合研究所は、2015年から東京大学社会科学研究所と共同で「子どもの生活と学び」研究プロジェクトを立ち上げ、パネル調査を進行中である。<https://berd.benesse.jp/special/childedu/>（2018年7月24日）
- 15) ベネッセ教育研究開発センター（2010）に調査票が公表されている。
- 16) 平成29年度学校要覧に記載の在籍児童・生徒数（2017年4月1日現在）を基準とした。
- 17) 粟島にはかつて野生の馬がいたとされ、島に馬を戻そうと2011年に牧場が開かれた。しおかぜ留学では、馬との触れ合いを通じた「命の教育」に取り組むことを特色の一つに挙げている。この点については、本報告書のヤン論文を参照。
- 18) ほかに、役場、観光協会、看護師、獣医、美容師、畑仕事、医師、その他がそれぞれ1人ずついた。
- 19) 発表作品は新潟県のホームページにも掲載されている。
【村上】平成29年度わたしの主張『村上・岩船地区大会』を開催しました（全発表作品を掲載しました） http://www.pref.niigata.lg.jp/murakami_kenkou/1356868937341.html（2018年7月3日）

文献

- 栗島浦小中学校（2017）：『平成 29 年度 栗島の教育』，栗島浦小中学校。
- 栗島浦村（2016a）：栗島浦村人口ビジョン—まち・ひと・しごと・まなび創生—。
<http://www.awashimaura.sakura.ne.jp/wp-content/uploads/2017/01/bjon.pdf>
- 栗島浦村（2016b）：「島民による栗島創生」戦略 ～世代や立場を超えた「未来創造プロジェクト」～ 第1版。 http://www.awashimaura.sakura.ne.jp/wp-content/uploads/2017/01/sogo_2.pdf
- 上田嘉通（2016）：新潟県の離島 栗島の未来創生事業から考える小規模・超高齢化地域の産業の未来像。JTB 総合研究所 | コラム。
<https://www.tourism.jp/tourism-database/column/2016/02/awashima/>
- 大脇和志（2017）：観光と教育による地域づくり—新潟県栗島を事例に—。地域と教育，(16)，pp. 75-98.
- 久保園梓（2017）：小規模小学校における複式学級の現状と課題—新潟県栗島浦小学校社会科を中心に—。地域と教育，(16)，pp. 37-57.
- 国立社会保障・人口問題研究所（2017）：日本の将来推計人口（平成 29 年推計）。
http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp_zenkoku2017.asp
- 高井盛雄（2015）：小中からのキャリア教育で夢実現へ—教育長はこう考える 高井盛雄新潟県教育長に聞く—。内外教育，(6403)，pp. 2-3.
- 地域総合整備財団〈ふるさと財団〉（2016）：『平成 27 年度「新・地域再生マネージャー事業」報告書』
- 新潟県教育委員会（2011a）：キャリア教育の手引き。新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ，第1部。 http://www.nipec.nein.ed.jp/sc/careerstation/download/houkokusyo_1syou.pdf
- 新潟県教育委員会（2011b）：新潟県キャリア教育パイロット事業研究報告書。新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ，第2部。 http://www.nipec.nein.ed.jp/sc/careerstation/download/houkokusyo_2syou.pdf
- 新潟県教育委員会（2016）：郷土愛を軸としたキャリア教育の推進—児童生徒一人一人の夢の創造と実現のために—。
http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Top2/463/162/leaflets.pdf
- 日本離島センター（2016）：「離島留学」「離島通学」実施小・中学校とその概要。しま，62(2)，pp. 87-93.
- 華井裕隆（2017）：社会的課題の解決を目指す取り組みの可能性—新潟県岩船郡栗島浦村栗島を事例に—。地域と教育，(16)，23-36.
- 引地力男，精松伸二，鎌田清孝，田中智樹（2012）：キャリア教育を目指した離島小学校へのものづくり教育支援。工学教育，60(6)，pp. 150-155.

- 藤田晃之 (2014) : 『キャリア教育基礎論—正しい理解と実践のために—』, 実業之日本社, 299p.
- ベネッセ教育研究開発センター (2010) : 第2回子ども生活実態基本調査報告書[2009年]. <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3333>
- 増田寛也編著 (2014) : 『地方消滅—東京—極集中が招く人口急減—』, 中公新書.
- 文部科学省 (2011) : 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) . 2011年1月31日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm
(2018年6月28日閲覧)
- 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター編 (2016) : 『変わる! キャリア教育—小・中・高等学校までの一貫した推進のために—』, ミネルヴァ書房.
- 益田卓弥 (2016) : 人口減少時代における離島集落の存続可能性の条件—滋賀県近江八幡市「沖島」の事例を中心に—. 龍谷大学大学院政策学研究, (5), pp. 57-76.
- 森川洋 (2015) : 人口減少時代の地域政策. 経済地理学年報, **61**, pp. 202-218.
- 山根栄次 (2012) : キャリア教育. 日本社会科教育学会編, 『新版 社会科教育事典』ぎょうせい, pp. 344-345.